地域における障害児の保健・医療・福祉の包括化に関する研究

― 変化する医療・保健の現状にこの研究テーマはどう影響を受けるだろうか ―

研究協力者　竹下研三[1)]　横山里佳[2)]　池田孝子[3)]
星野由美[3)]

研究の要約

母子保健法が改正された場合、これまで３歳児健診を行なっていなかった市町村の少なくない地域が物理的な理由から健診の見直しをすると考えられる。これまで発達障害児の早期発見や障害の軽症化は健診、とくに集団健診とそれに続く事業の向上によって成功をみてきた。この事を確認するために、精神遅滞や自閉症を中心とする発達障害児と現行の各集団健診との関係、障害児をもつ母親へ健診への振り返り評価、今日の母親の健診への期待内容を調査した。集団健診から専門医療機関へ紹介されてくる障害児は全体の 68%であり、いずれの集団健診からもみられた。健診の再審査や専門機関への受診の勧めは親たちにとまどいを作っているが、振り返っての評価ではほぼ肯定的であった。保健婦の接遇教育によりこの評価はさらに高くなると考えられた。乳児健診への母親の期待には他の子どもたちを見たい、他の母親とのふれあいへの期待が高く、集団健診の育児環境向上への意味の大きさが改めて肯定された。

見い出し語：発達障害、乳幼児健診、集団健診

1) 鳥取大学脳研小児科　2) 国立療養所松江病院　3) 松江市役所

研究目的

母子保健法が改正されようとしている。具体的な改正内容ではっきりしている点は３歳児健診が保健所から市町村事業へと移されることである。健診の連続性と現状の保健所機能から考えればこの改正は当然の帰結であろうが、受ける市町村に保健婦の増員が今の所ほとんど期待できないため、３歳児健診を行なっていなかった自治体はそれぞれの事情によって現行健診の見直しを行なうであろう。これは、これまで集団健診に協力してきた公立病院の医師が病院の経営問題から院外の協力にブレーキをかけられてきている問題と合わせ、集団健診の維持・発展を困難にさせていくことになろう。

一方、発達障害児の早期発見と症候の軽症化はこれまでこの集団健診とその後の事業の質の向上の上に立って成功を見、現在も現行のシステムを前提にしてその後の対策を考えてきている。

このシステムの基本が壊れていく可能性が生じている時、われわれはこれに先手を打って発達障害対策における現行健診の効果を明確に示し、さらに今後のあるべき姿を提示する必要はないだろうか。

この研究はこのような事態を意識し、最近の発達障害児、とくに精神遅滞、自閉症、その他の発達遅滞児が発見されてきた経由と乳幼児健診や再審査（発達クリニック）との関わり、また彼らの母親が過去の乳幼児健診やその後の再審査（発達クリニックや医療機関への受診）への評価を振り返りアンケートの調査により検討し、また、現在の乳幼児健診に来所した母親へ集団健診に対する彼らの抱いている期待と評価を調査した。

研究の方法

鳥取大学脳研小児科に昭和60年から平成２年末までの５年間に受診し、受診時において精神遅滞、自閉症、器質的な発達障害が疑われ、発達遅滞（精神遅滞リスク）と診断された計111名（男 82、女29）を対象にして、(1)３群ごとに疑われた年齢と紹介されてきたルートについて調査した。また、(2)この中で乳幼児健診から疑われてきた児（75名、67.6%）の母親に、当時を振り返って乳幼児健診への評価と希望をアンケートによって調査した（回収56名、回収率74.7%）。調査内容は、(1)保健婦から勧められた時、とまどいがあったか、(2)再審査を積極的に受けようと思ったか、(3)当時、子どものことで困ったり不安をもっていたか、(4)再審査とその説明に満足したか、(5)その他の感想、である。なお、脳性麻痺は多くの場合、０歳で未熟児センターや健診、医療機関などより直接送られてくる場合が多いので対象としなかった。また、(3)某市で行なっている一般の４か月乳児の集団健診に受診してきた保護者（主として母親）に健診への期待や健診方法への希望などについてアンケート調査（264名、回収率87.5%）を行なった。調査内容は家族構成や親の年齢、児の同胞など一般的な内容の他、(1)健診への関心、(2)健診への期待、(3)相談できる人の有無(4)診察への満足度、(5)保健婦の説明評価、(6)待ち時間、(7)健診への評価、(8)集団健診と個別健診への希望、(9)その他の感想、である。

結果

(1)発達障害児の診断された年齢。

精神遅滞、自閉症、その他の発達遅滞児で、遅滞が疑われた年齢は表１の通りであった。精神遅滞児（n=43）の32%（n=14）が０歳代で、42%（n=18）が２歳末までに、合計74%（n=32）の児が２歳末までに受診していた。自閉症は当然のことながら１歳をすぎてからであった。受診時点で障害は明瞭であるが診断のはっきりしない発達遅滞児もやはり１歳を越えてから受診していた。

これら発達障害児の紹介されてきたルートは表１のごとく、０歳（n=15）では医療機関と健診からがほぼ50%（8:7）ずつであった。医療機関からの児はダウン症候群のように奇形の合併など身体的問題の合併があった。健診からの児は頸定の遅れなど運動発達遅滞の合併例であった。１～２歳末で診断された児（n=43）では、72%（n=31）の児が健診からであった。運動発達遅滞の合併や発語の遅れが問題の症候であっ

表１　発達障害（精神遅滞、自閉症、その他の発達遅滞）が医療機関で診断された年齢

	精神遅滞	自閉症	その他の発達遅滞	計
～ 1歳	14 (32.6%)	1 (9.1%)	0 (0.0%)	15 (13.5%)
1～ 2歳	18 (4.19%)	6 (54.6%)	19 (33.3%)	43 (38.7%)
3歳～	11 (25.6%)	4 (36.4%)	38 (66.7%)	53 (47.8%)
計	43 (38.7%)	11 (9.9%)	57 (51.4%)	111 (100 %)

表２　発達障害児（精神遅滞、自閉症、その他遅滞）が紹介された経路
（クリニックとは健診の後に再審査と簡単な指導を行なう健診を意味する）

	０健診	ｸﾘﾆｯｸ	1.6健診	ｸﾘﾆｯｸ	３健診	ｸﾘﾆｯｸ	その他	計
～1歳	5	3	-	-	-	-	7	15(13.5%)
1～2歳	-	-	8	23	-	-	12	43(38.7%)
3歳～	-	-	-	-	15	21	17	53(47.8%)
計	8 (7.2%)		31 (27.9%)		36 (32.4%)		36 (32.4%)	111(100 %)

た。医療機関からの紹介は28%（n=12）であった。紹介されてきた症候は0歳児と同じく奇形や皮膚症状など身体的問題を合併している症例が多かった。3歳を越えた場合（n=53）、やはり68%（n=36）の児は健診からであった。言語遅滞や行動の異常が中心的な症候であった。なお、3歳過ぎてからはその他のルートとして保育所からの指摘がきっかけとなった症例が17名中12名（71%）にいた。

(2)健診から来院した発達障害児の母親の健診への評価。

111名の中で健診から来院した75名（67.6%）の母親にきっかけとなった健診への気持ちをアンケートによって尋ねた。回答は66名（88%）から得られた。表3（a，b，c）のように再診への戸惑いが52名（79%）にあった。しかし受診への積極性は比較的に高かった（49名、74%）。そして、受診後の満足度も高かった（60名、91%）。しかし、受診に積極的でなかった

表3　発達障害児の母親へ乳幼児健診への思い出アンケート（n.= 66）

a とまどいの有無（%）		b 受診への積極性（%）		c 満足度（%）	
有り	48.5	あった	74.2	満足	60.6
少し有り	30.3	なかった	18.2	まあ満足	30.3
ない	13.6	不明	7.6	少し不満	7.5
不明	7.6			不明	1.5

表4　乳児健診に来た母親たちの健診への期待と健診形式への希望

a 期待の内容（%）（重複回答）		b 健診方式への希望（%）	
発育の確認	92.0	集団健診	53.2
健康の確認	75.0	個別健診	14.3
子どもを見たい	48.5	どちらでも可	32.5
発達の確認	44.5		
食事指導	34.6		
育児相談	21.2		
母親とのふれあい	16.5		
新しい情報	12.0		

児の母親の感想にはつよい批判があった。すなはち、健診後の保健婦の話しの独断性や高圧性への立腹や反発が多かった。また、感想の中には気分の落込みの強かったことを述べた意見もあった。

(3)乳児（4か月）健診へくる母親の健診への期待。

某市において、一般の乳児健診に受診した母親からのアンケート調査では表4aのごとく、発育、健康、発達の確認が高かった。興味を引かれたのは第3位の子どもたちをみたい（48.5%）、第7位の母親とのふれあい（16.5%）であった。乳児健診への関心度は第1子の母親ほど高かった。

(4)集団健診と個別健診への期待度

同じアンケートで、集団健診と開業医への個別健診への希望を尋ねた。表4bのごとく集団健診を53.2%の母親が希望していた。

考察と結論

1．発達障害の診断される年齢について。

発達障害の診断年齢は当然のことながら症状の内容によって異なる。運動発達遅滞や奇形疾患が早く診断され、言語や行動の問題が遅くなる。精神遅滞も合併する運動発達遅滞や奇形の有無によって異なり、これらが合併すれば早くなる。また、精神遅滞や自閉症は重度ほど早く疑われてくる。今回の対象はこの傾向そのものをもっており、早く診断される精神遅滞は中等度以下の重度群であり、自閉症も1～2歳で診断されている群は多くが精神遅滞との合併と理解される。その他の遅滞群は軽度から中等度の精神遅滞が大部分と考えてよいであろう。以下の考察は対象がこのようなグループとして理解してほしい。なお、脳性麻痺は今回の調査には前述の理由から加えていない。

2．専門医療機関へ発達障害児が紹介されてくるルートについて。

われわれの小児神経・発達障害専門外来に受診してくる発達障害児の来所ルートは、67.5%が乳幼児健診からであった。また、これらの健診は全例集団健診でもあった。健診の種類は乳児、1歳6か月、3歳児のいずれからもみられた。乳幼児健診やそれに続く発達クリニックから紹介される児の年齢にはとくに数の上からは差はなかった。しかし、どの年齢も再審査、いわゆる発達クリニックからの児が多かった。これは一度、リスクのある児をこのクリニックで見ることにより障害の内容の再確認とともに障害を認知してもらいやすい場を前もって作っていることが想像された。このようなクリニックは障害認知へのクッション役をはたしており、このクリニックの別の意味の重要性が明らかとなった。医療機関からの紹介は奇形など身体症候を合併している症例に多かった。ダウン症候群などは全例が医療機関からであった。すなはち、発達障害の早期発見には乳幼児健診の果たしている役割が非常に大きいことが再確認された。また、医療機関からの紹介は奇形など医療的措置が必要な症例であり、行動内容からの紹介ではないことも明らかとなった。なお、3歳を越えてくると発達障害の発見に保育所の関与が多くなっており、保母の発達障害への知識が高くなっていることが推測された。このことは

別の機会に調査した保育所園長と保母にアンケート調査した結果からも同様であった。すなはち、保育所が障害児保育や発達障害児を園に認めた場合の相談先などについて調査を行なった所、ほとんどの保育所とそこに働く保母の相談相手に障害児医療の専門家がおり、その知識にも高いものがあった。

3．再審査（医療機関と発達クリニック）への発達障害児の母親の思い出。

対象児111名の内、乳幼児健診から再審査（医療機関発達クリニック）へ回された児の母親に当時の思い出を振り返りアンケートにより調査したが、当然のことながら戸惑いが78%と多かった。しかし、受診への積極性も74%と高かった。一方、積極的になれなかった母親も18%と無視できない率であった。ここには、例外なく保健婦の対応への不満があった。あまりに独断的な言い方である、こちらの不安な気持ちを理解していない、冷たいなどであった。発達障害リスク児への再審査の勧め方や発達クリニックでの対応などについて保健婦への節遇教育が必要と考えられた。

4．一般の母親の乳幼児健診への期待と健診形式への希望。

健診への親の期待にわが子の発育、発達、健康などがあることは当然であるが、他の子どもたちを見たいが50%近くに出たことは驚きであったし、今日の母親の気持ちを率直に現わしているとも思われた。また、類似する内容として16%の母親が母親とのふれあいを求めていたのも驚きであった。このことは当然、健診に集団健診を希望する率の高さとも相関したと考えられた。子育て不安が言われている今日、家庭環境、とくに児への話しかけの阻害は軽度発達障害を作りだす要因のひとつでもある。母親の健診への上記のような要望はこれらのリスクを自ら防ぎたいという声としても理解される。

結論として、今回の調査で明かになっていることは発達障害の早期発見に集団健診は大きな役割を果たしていること、乳児、1歳6か月、3歳で一般に行なわれている集団健診はそれぞれにこの早期発見に重要なキー年齢となっていること、保健婦の対応についての努力が満たされるならば、健診から診断・療育へのルートはよりスムースにいくであろうこと、子育ての不安は児への母親からの話しかけ阻害をもたらす危険があるが、これは軽度発達遅滞児を作るリスクとなっており、この予防に集団健診の意味が非常に大きいことなどが挙げられた。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

研究の要約

母子保健法が改正された場合、これまで3歳児健診を行なっていなかった市町村の少なくない地域が物理的な理由から健診の見直しをすると考えられる。これまで発達障害児の早期発見や障害の軽症化は健診、とくに集団健診とそれに続く事業の向上によって成功をみてきた。この事を確認するために、精神遅滞や自閉症を中心とする発達障害児と現行の各集団健診との関係、障害児をもつ母親へ健診への振り返り評価、今日の母親の健診への期待内容を調査した。集団健診から専門医療機関へ紹介されてくる障害児は全体の 68%であり、いずれの集団健診からもみられた。健診の再審査や専門機関への受診の勧めは親たちにとまどいを作っているが、振り返っての評価ではほぼ肯定的であった。保健婦の接遇教育によりこの評価はさらに高くなると考えられた。乳児健診への母親の期待には他の子どもたちを見たい、他の母親とのふれあいへの期待が高く、集団健診の育児環境向上への意味の大きさが改めて肯定された。